

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二第 卷三十第

行發日一月八年十正大

論叢

租税に於ける給付能力の原則

法學博士 神戸 正雄

累進税説の統計的觀察

法學士 汐見 三郎

中世都市の發達

文學博士 三浦 周行

農業勞働問題

法學博士 河田 嗣郎

時論

大正十年度の豫算を讀む

法學博士 小川郷太郎

說苑

八時間勞働制の沿革

法學博士 山本美越乃

井リヤム・タムスンの分配論

經濟學士 堀 經夫

雜錄

史的唯物論略解

法學博士 河上 肇

家畜保險に就て

經濟學士 野口 正造

井リヤム・ダムスンの分配論 (一)

堀 經 夫

序言 タムスンの經濟學史上の地位

第一章 タムスンの根本思想

第一節 分配論の重要——第二節 分配の平等

第二章 自由競争の上に立つ經濟組織の檢討

第三章 相互協力の上に立つ經濟組織の檢討

結論

本號所載

次號以下掲載

序 言

アダム・スミスに始まり、リカアド、マルサスを経て、デヨン・ステウアト・ミルに至つて大成せられたる英國經濟學說の一系統を、吾々は普通に正統派經濟學又は個人主義經濟學と呼んでゐる。此の學派は、實に今日まで、經濟學の正系となり中心となり來つた所のものである。併し乍ら、之に正統派といふ文字が冠せられてゐることは、同時に、これに對して『正統ならざる』或る學派の存在せることを、表明するものである。吾々は、之を社會主義經濟學と名付ける。其の代表的學者は、言ふ迄もなく彼のカアル・マルクスである。正統派より見れば、この『正統ならざる』

經濟學は異端邪説であらう。然し今日其の重要性に於て、後者は決して前者に劣つてゐないのみならず、却つて益々其の價値を認められつゝある。世人は、此等兩説の結論が甚しく相違せるを見て、其等が其の成立の根本よりして全然氷炭相容れざるものであるかの如く考へ易い。去れど今日兩者の間に似ても似つかぬものがあるといふことは、必ずしも彼等が生れ落ちし際に既に異なる母を有つてゐたものであると速断するを許さない。否寧ろ彼等は同じ腹より生れ出でたる兄弟であると思ふ方が適當であらう。現にマルクスの如き、其の價値論に於て、リカアドを母に有ちスミスを祖母に有つてゐる。然し、母を同じうする兄弟が生長するにつれて外圍の環境に影響せられて全く異なる人間になることがある如く、同じ思想より出發したる經濟學者達も、彼等の性行や社會の諸事情や彼等自身の境遇やに左右せられて、段々と異なる思想と學説とを懐くに至つたのは怪しむを要しない。彼等の中で、個人主義的、資本主義的經濟學説を把持してゐたものは、丁度當時の社會の傾向及び特に支配者階級の人々の思想に合致したので、終に正統派といふ形容詞を受くるに至つた。そうしてマルクスに至るまでは、此等正統派に屬する學者のみの獨り舞臺であつて、之に反する説を持つるものは、不遇なる境涯を辿らなければならなかつた。英國第十八、十九世紀經濟學の裏面史を編む所の人々が即ちそれである。キリヤム・ゴドキン、ロバート・オウエン、デヨン・グレイ、デヨン・モルガン、デヨン・ブレイ、トマス・ホヂスキン、及びチャテリスト運動に参加せる人々等を、其の中に數へることが出来る。余が茲に研究せんと欲するキリヤム・ダムスンも其の重要な一人である。彼は第十八世紀の末葉にアイルランドのコークに生

れ、一八三三年に約五十歳をもつて死せる人である。彼は富める地主であつて、所謂「他人の労働の生産物であつて人が地代と呼ぶ所のもの」で生活をしてゐたが、後にオウエン主義を奉じ、終に一八三〇年に、彼れの財産の大部分を同主義實行の目的の爲めに差出すべく遺書した程、爾かく熱心になつた。但し此事は、親族の反對があつて殆ど實行が出来なかつた。

彼は、ベントム主義者であると共に、オウエン主義者である。彼は又、リカアトの思想を承継ぐと共に、ゴドキンの意見をも取入れてゐる。然らば此等の多くの思想は、如何にしてタムソンの思想の中に於て調和され統一されてゐるか。是れは啻に理論上興味ある問題であるのみならず、英國に於ける初代の社會主義者が、如何にして個人主義經濟學より離れて、それと別の途を辿るに至りしかを見る上に於て、學說史上甚だ重要なものであらう、と思はれる。

タムスンには、以下列擧するが如き論著がある。

『人間の幸福を進むる上に最も役に立つ所の、富の分配の原理に關する研究、富の任意的平等に關して近頃提議されたる制度に當嵌めて見て。』(一八二四年)

『人類の一半たる女子が、他半たる男子の僭越——女子を政治的奴隸、従つて民法的及び家内の奴隸として留め置かんとするの——に反對して提起する訴、ミル氏の有名なる「政府論」の一項に答へて。』(一八二五年)

『報いられたる労働。労働と資本との要求の宥和、即ち如何にして労働に、その努力の全生産物を確保するや。』(一八二七年)

『相互協力、共同所持、及び勤勞並びに享樂手段の平等、の原理に基ける共產團體の速かなる且つ經濟的なる設立に對する、實際的指導。』(一八三〇年)

此等はタムスの思想を研究する上に於て、是非見なければならぬ書物であるけれども、不幸にして、第一に掲げたる、彼れの分配論に關する書物の外は、之を手になし得ざるが故に、本論文に於ては、専ら此の一書を中心として、前記の諸點を研究することとし、他の書物を手に入る、の日を待つて、タムスの研究を完うすることゝ爲やうと思ふ。併し乍ら此の『分配論』は、タムスの論著中、其分量に於て最大であるのみならず、彼れの思想の理論的根據の説明を殆ど盡し且つ彼れの其後の著作に現はれたる結論に至る道程を畧察せしむるに足るものを含んで居るが故に、本書を研究すればタムス研究の大半を卒へたりといふも、強ち過言でなからうと思ふのである。

タムスの分配論の内容を研究するに先つて、彼れの議論の組立を明かにする必要がある。蓋しこの組立を最初に説明して置かなければ、正に六〇〇頁に亘つて繰返し叙述せられたる彼れの意見を、其の核心に觸るゝことなくして、無意味に羅列することゝなる虞があるからである。

タムスは、先づ第一に、所謂功利主義即ち最大多數の最大幸福といふ主義が、經濟學の奉すべき不變の理想であることを説き、其の實現の手段としては、社會の富の正しき分配といふことが最も重要なことを論じてゐる。それは、極く大體に於て、彼れの『分配論』の緒言の後の三分

の二及び本論の第一章を占めてゐる。余は本論文の第一章第一節及び第二節に於て其の大體を紹介する積りである。

次に最も注意すべきことであつて、而かも普通に餘り明白にされてゐない——勿論それはタムスの章の分け方等に不備な點があるからでもあるが——ことは、タムスンが彼れの分配論の議論を、自由競争の行はるゝ社會並びに自由競争の行はれざる相互協力の社會の二つのものに就て、別々に叙述し、而して此等を比較對照せしめてゐるといふことである。このことは、彼れの『分配論』の第一章以下總ての章に亘つて試みられてゐる所の顯著なる事柄である。唯だ是等二つの社會の何れがより良きかに就ては、彼は本書中には未だ明白に之を記述してはゐないけれども、而かも全篇を逆讀して得たる印象及び彼れの後の著作の書名等より見るときは、吾々は容易に、タムスンがオウエン流の相互協力の社會を終に最良なるものなりと斷定したることを、看取し得やう。

之を要するに、彼は總論とも謂つべき部分に於て、功利主義といふが如き根本的な不變の原理を説き、而して此等を常に基本概念となしつゝ、各論とも謂つべき部分に於て、自由競争の社會及び相互協力の社會の長所並びに缺點を述べて居るものゝ如くである。勿論このことは、前にも述べし如く、『分配論』の中に明かに區分されてある譯ではないけれども、タムスンの思想を理解する上に於ては、かくの如く組織立て、研究するを便宜なりと信するが故に、余は上記の趣意及び順序に従つて、以下研究を進めやうと思ふ。

第一章 タムスンの根本思想

第一節 分配論の重要

タムスンは、如何にせば最大多数の最大幸福が得らるゝか、といふ問題の解決を、彼れの中心目的となした。換言すれば、所謂功利主義が彼れの思想の嚮導原理であつた。『分配論』第一章の冒頭に曰く、

『善き結果と悪しき結果、又直接の結果と間接の結果、此等總ての諸結果を較量する所の功利、即ち人間の幸福の最大可能量の追求、これが本研究に於て常に記憶されて居る所の嚮導原理であつて、而して之に對して他の總てのものは從屬的のものたるに過ぎない。』¹⁾

こは取も直さず、ベンタムの功利主義を其の儘承け繼げるものである。

然らば彼は、此の理想を如何にして實現せんと欲したかと云ふに、それは富の公正なる分配といふ手段によつてである。『分配論』の主たる目的は、其の書名の示す如く、實に『人間の幸福を進むる上に最も役に立つ所の、富の分配の原理』の發見といふことに在つたのである。勿論後にも述ぶる如く、タムスンは富の生産といふことを決して輕んじた譯ではないけれども、而かもそれは分配の爲めの生産であつて、分配は矢張り常に第一義的地位を占めて居る。是れは、彼が、『一貧者より一錢を取つて之を一富者に與へよ、然らば該貧者は、該富者が得るよりもより多くの幸福を失ふこととなる、』といふベンタム流の功利主義的見地より發して、如何に富の生産が大であ

1) Thompson, Distribution, p. 1.

つても、其の分配方法に上述の如き缺陷が有るならば、結局最大多數の最大幸福といふ理想は達し得られない、と考へたが故である。彼曰く、

『一つの團體にとつて重大なのは、富の單なる所有ではなくて、其の公正なる分配である。それは個人に就て然うであると同じく、團體に就ても然うである。人は物的享樂手段——それは總ての文明社會に於て、主として富の客體より成立してゐる——無くば、幸福たり得ない。併し此等の物體の比較的少量を以てするも、人々は奮つて彼等が幸福であると見えしよりも、より幸福であるかも知れない、他方に、有り餘る程に此等の物體を有つてゐても、彼等は尙ほ悲惨であるかも知れない。社會が主として利害關係をもつて居るのは、富の客體の數量ではなくて其の用途及び分配である。』²⁾

更に進んでタムスは、富の公正なる分配が人間の物的愉樂より受くる所の幸福のみならず、間接には總ての精神的愉樂より受くる所の幸福をも、増進するものなることを述べてゐる。曰く、
『富の分配よりも、より興味ある題目はない、又若し正しく取扱はるゝならば、これよりもより有用なる題目はない、何故なれば常に直接には各社會の物的愉樂のみならず、間接には甚だ大なる程度に於て、社會が享受し得る所の、道徳の分量 (quantity of morality)、同情、細心、及び慈恵より受くる快樂の分量、並びに知的享樂の分量は、富の正當にして且つ賢明なる分配に依存するものなることが、發見さるゝであらうから。』³⁾

タムスが富の分配なる問題を特に重要視したる理由は、以上によつて明かであらう。

2) Ibid. p. IX.

3) Ibid. p. I.

尤もタムソン以前に於て、富の分配といふことが經濟學者によつて全然顧られてゐなかつたといふのではないけれども、——例へばデニムズ・ミルは其の著『經濟學の原理』に於て、『分配』なる章を設け、又其の中に『分配の自然法則』に就て論じてゐる、——そは、分配が富の『再生産及び蓄積に影響を及ぼすであらう』所の範圍内に於て、研究せられたのみであつて、そが直接に人類の幸福に關係するといふ意味に於ては、全く度外視されてゐたのである。

抑も經濟政策の根本原則として、生産と分配とが其の重要さを等しくし、此等が車の双輪の關係に在るといふことは、今日何人も疑を容れない所であるが、併し之を歴史的に見るならば、生産と分配とは、必ずしも同様の取扱を受けなかつた。實にヘンリー・シジニキクの言へる如く、『アダム・スミス及び彼れの初期の承繼者は、彼等が一つの技術(政策の意——譯者註)としての經濟學を論ずる限りに於て、經濟學の目的は富の國民的、生産を出來るだけ大にすることに在ると考へたのであつて、そうして出來るだけ良い分配を目的とするといふやうな考を懷いてゐたやうには、殆ど見えない。』即ち所謂正統派に屬する人々は、如何にせば富の生産を其の原費に比して大ならしむることが出來るか、即ち如何にせば勞働をしてより生産的ならしむることが出來るか、といふ問題を主として取扱つたのであつて、勞賃の増加といふが如き分配の問題は、生産の問題が解決されたる後に、始めて而かも必然的に解決し得る所の第二次的の事柄に過ぎないと看做したのである。之に反してタムソンは、前述せる所によつて既に明かなる如く、如何程多くの富が生産されても、若し其の分配方法にして當を得ないならば、公正に分配せられたるより少し

4) Ibid. p. IX.

5) Henry Sidgwick, The Principles of Political Economy, 2nd ed., (1887), p. 396. Cf. ibid. pp. 24-25.

の富よりも、社會的により少い效用を生むに過ぎない、といふ見地よりして、富の生産よりも其の分配の方がより重要であると考へた。

正統派經濟學よりして『正統ならざる』社會主義經濟學が分岐したのは、正に斯くの如き見地の差によるものである。併し乍ら若し人があつて此等の兩派を以て全然其の本質を異にするものであると解するならば、そは大いなる誤である。何故なれば、此等兩派は目的を達する手段に於ては斯くの如く互に相違してはゐるけれども、目的其物に就ては功利主義といふ全然同一なる見地に立つてゐるからである。(註)

(註) 功利主義は、其の源をロック、ヒューム等に發し、倫理學說としても可なり大なる影響を及ぼしたが、それよりも經濟學の根本概念として常に意識的に又は無意識的に想定されることによつて重要な役目をなした。アダム・スミスも、其の倫理學說に於ては兎も角、其の經濟學說に於ては、功利主義を採用した。メンタムは、個人主義經濟學と倫理學とを功利主義の下に統一した人であると謂はれてゐる。然し、功利主義は個人主義經濟學の根本概念であるのみでなく、亦社會主義經濟學の根本思想でもある。タムスンがメンタム主義者であるといふのは、彼がメンタムより功利主義を取り來つたことを指すのである。唯だ異なる點は、メンタムはスミス等と同じく富の生産によつて功利主義的結果を得んとしたるに反し、タムスンは富の分配によつて之を達せんとしたることに在る。

第二節 分配の平等

吾々人間は、快樂と苦痛とを感受するの能力を有し、而して本能的に苦痛を避けて快樂に就かんとする所の感情的動物である、とタムスンは看做した。幸福とは、快樂の感情の繼續的狀態をいふ。即ち快樂は幸福の構成部分であつて、幸福は快樂の總計である。然らば如何にすれば最大

多數の人が最大多量の幸福を享受することが出来るか。

タムスは、このことを説明するに當つて、先づ『總ての正氣なる個人は、同様に取扱はるゝならば、富の客體の相等しき分前よりして、相等しき享樂を得ることが出来る。』といふ前提を置いてゐる。(註)

(註) かゝる見方は、一見人間を全然機械的に觀察したる結果なるが如くであるけれども、併しタムスは決して教育又は境遇の差による人の性情の差といふことを閉却して居るのではない。博士シユアルツハイム及び其の後繼者達の主張するであらう如く、人間の腦髓の中には一定數の細部分に分れてゐて、其等が適當なる刺激を受くる時は夫々獨特の感情を惹起するものであるとか、腦の此等の部分は、或る事情の下に於ては、この一定の感情を特定の行爲に導くものであるとか、若くは此等の各機關又は腦髓全體は、境遇又は教育の如何に拘らず、常に特定の習慣と性格とを生むものであつて不可變性を有するものであるとか、といふ考には賛成が出来ない。タムスは明かにつて居る。併し乍ら斯くの如く人の性質に及ぼす教育と境遇との影響を認むるも、このことは決してタムスの上記の前提を無意義にはしないであらう。何故かといふに『同様に取扱はるゝならば』といふ條件が附隨してゐる爲めに、この前提は、教育及び境遇の差如何を無視したる場合の説明であつて従つて人間の本來の性情を純粹なる形に於て觀察したる場合の立論である、といふことになるからである。例へば、若しも同一分量の富が奴隸と主人とに與へらるゝならば、前者によつてより多くの幸福が感受されるべきは、明白なる事柄である。これ蓋し主人と奴隸とは實際上『同様に取扱はれてゐないが故である。併し乍ら若し吾々が自然の儘の人間として此等の兩者を考へ、而して其の享樂能力を比較するならば、其間に何等の差等を發見し得ないであらう。タムスは斯く考へて、人は同一分量の富よりして同一程度の幸福を感受し得るものと斷定した。余は今其の當否を姑らく不問に附して、只タムスの論理を進めることとする。

今假りに此の前提を正しいとするならば、最大多數の最大幸福を得んが爲めには、富を可久的

6) Thompson, Distribution, p. 23.

7) Cf. ibid. p. 21.

に平等に社會各構成員の間に分配することが望ましいといふことは、自明の理であらう。蓋し、同一の富の各單位が順次に同一人の所有に加へらるゝ毎に、それは幸福を生産するのを遞減するものなるに反し、そが多くの個人の間に分配さるゝならば、それは皆相等しき分量の幸福を生産することによつて、其の幸福生産の最大能率を發揮するであらうが故である。タムスン⁸⁾は次の如き例を擧げて、このことを説明してゐる。曰く、

『若しも小麥が慾望の目的物であり且つ稀少なる物であるとするならば、……それを二十日間連續的に使用する人、即ち二十倍の分量を使用する人は、各單位量の分前を受くる所の三十名の消費者よりも、決してより多くの享樂をそれより得ないであらう、(他の總ての事情は相等しいとする)、何故なれば、此等三十名の各々は、新奇なる獲得(物)を享受するであらうに反し、三十單位の分前を消費する人にとつては、次ぎ次ぎの各部分は、段々と此の(新奇といふ)性質を失つて、益々其の價値を減少するに至るであらうから。爾かのみならず、三十名の人々の、食事より受くる所の單なる物的享樂は、周圍に於て同じ様に享樂しつゝある人々の満足に共鳴を感ずることの快樂によつて、なほ高めらるゝであらう。之に反して、三十單位の分前を單獨で消費する人の享樂は、相等しき分前を剝奪されてゐる人々の嫉妬及び惡意によつて、殆ど無になるまで減少せしめらるゝであらう。』

斯くて、或る貨物にして、十分なる享樂を與へ得る所の各部分に分割さるゝことが可能であり、又爾かく分割さるゝに足るだけの分量に於て存在する限り、幸福は該貨物の平等なる分配によつ

8) Ibid, p.93.

て増加さるゝものであるといふのが、タムスンの結論であつた。こはベンタムが、『富の分配は、平等に近づけば近づくほど、全體の幸福の分量は、益々大となる、』と言つたのと合致してゐる。

併し乍ら事の實際を観察するに、各個人は他人の幸福を犠牲にしてまでも、自己の幸福を追求せんと焦つて居る。各個人は、成るべく多くの富を自己の手中に入れ、以て直接には物質的快樂を、又間接には精神的快樂を、成るべく多く獲得せんとして居る。而して斯かる行爲を是認し且つ之に裏書を與ふる所の學說としては、『各個人は自己の幸福の最良の判断者である』といふこと、及び『個人の集合體たる國家又は社會の幸福は、各個人の幸福の總計である』といふことを前提として、最大多數の最大幸福は各個人をして自由に自己の利益を追はしむることによつて必然的に達成し得らるゝものである、と主張するアダム・スミス等——而して實にベンタムも之を主張する一人である——の意見がある。

是に於て同じ功利主義の根據の上に立ちながら、富の平等なる分配によつて之を達せんとするものと、各人の利己的活動を許して富の不平等なる分配を認めつゝ之を達せんとするものとの、二つの相反せる主張——此等の主張が相反してゐることは、第二章に於て詳説する——を吾々は見出したる譯である。而して茲に注目すべきは、ベンタムの立場である。彼は、スミスに味方すると共にタムスンにも一致してゐる。而かもスミスの立場とタムスンの立場とは、全然相容れない。余はベンタム論を試みて居るのではないから、今此問題を取扱ふ積りではないが、唯だ一つ明瞭に言ひ得らるゝことであつて、而して本論文に關係のあることは、タムスはベンタムより

功利主義を得來つたけれども、之を達する手段として分配の平等といふことを終始一貫して主張したるが爲めに、正統派の主張たる自由放任主義と妥協すること能はず、終に此點に於てベンタム主義に重要な修正を加へざるを得なくなつた、といふことである。(註)

(註) 余は、この分配の平等といふ思想が、タムソンの根本思想であるを考へる。彼は、之を措いて他に、最大多数の最大幸福を實現するにより適當なるものを見出し得なかつたのである。されば彼にとつて此の原理は、社會經濟組織の如何を問はず、常に目指さるべき理想であつた。惟ふに此の思想は、今日所謂生存權の主張なるものと軌を同じうするものであらう。アントン・メンガアの與へたる定義によれば、生存權の主張とは、『社會の各員は、彼れの生存に必要な物財及び義務が他人の緊切の度少き欲望の充足に供せられるに先ち、現存資料に應じて彼に頒與されることを要求する權利を持つて居る。』この主張を言ふのであるが、之を言ひ換ふれば、苟くも世に生を享けたる以上、如何なる人間も、少くとも生活必需品の平等なる分配を受けて、生存を保つて行くの權利をもつて居る、といふことになる。これ、タムソンが、『平等の規則は、假し生産に労働が使用されざる場合と雖も、常に従はねばならぬ』と言つて、總ての人間——労働者たるを不勞者たるを問はず——が富の平等なる分配を享くべきものなることを主張したること、符節を合するが如くである。併し乍ら注意しなければならぬことは、生存權の主張者とタムソンとの此の一致は、單に議論の結果の一致に過ぎないのであつて、兩者が如上の相似たる主張をなすに至りしその根本觀念は必らずしも相等しくないとはいふことである。蓋し生存權の主張者が富の平等なる分配を主張するに至りしは、彼等が人間に、生を享けたる以上之を續けて行く、即ち生存をして行く、といふア・プリオリなる權利を認めたるが故なるに反し、タムソンが富の平等なる分配を主張するに至りしは、それが人類の最大幸福を齎す唯一の道であるを考へたるが故である。タムソンは此の點に於ては飽くまでメンタム流の功利主義者であつた。要するに、タムソンは人類の幸福の増進にとつて、富の平等なる分配が最も有效なることを信じてゐた。然らば此の制度は、果して今日の社會組織の下に於て實現されてゐるであらうか、又實現され得るであらうか。それを妨ぐるものはないであらうか。又他の社會組織の下に於ては、此等の問題は如何なるであらうか。余はタムソンに従つて以下此等の問題の検討に歩を進むるであらう。

10) 森戸氏譯、近世社會主義思想史、一五頁

11) Distribution, p. 95.